

阿部信行

（訳者コメント）

マレーシア機撃墜事件については、親ロシア派の誤射が疑われていますが、状況的に間違いないと思います。

この事件の最初にプーチンが誤射の可能性を認めて全面協力の姿勢を見せれば西側のプーチンに対する姿勢も変わったと思いますが、残念ながらそうではなく、ますますロシアに不利な方向に向かっていきます。ロシアが頑なに非を認めない理由は、プーチンのウクライナに対する認識が背景にあるようです。

今日の記事内容は、漢和防務評論誌の総編集長による「ロシア側から見たウクライナの現状」です。同氏は、「病める民主主義は、健康な独裁政治に如かず」として民主主義万能を批判しています。

KDR 編集部

3月のウクライナ“政変”は、クリミアがウクライナから離脱するという伏線があったため、ウクライナが分裂した。旧ソ連の崩壊は、ウクライナ民族主義者の独立指向勢力に絶好の機会を与え、100年の独立の夢が実現した。しかし建国後22年の実態を見ると、ウクライナにおいて民主制度は万能ではなかった。今日のウクライナは、指導者が非現実的政治外交を主張している。

多少とも外交的センスのある人ならば、“ウクライナのように中欧とロシアの中間に位置する国家は、文化、民族、経済及び軍事面で、ロシアと密接不可分な関係にあり、しかもエネルギー面でロシアに大きく依存している”ことが分かる。したがってウクライナ立国のための外交政策の基本は、全方位友好であり、一方に偏ってはならず、EU及びNATOと経済及び安全保障関係を発展させると同時に、ロシアとの友好関係を保持しなければならない。これと同時に、次の2つも両立させなければならない。すなわちロシアは、ウクライナと友好関係を保持しつつ、ウクライナの西側接近を妨げないこと。またウクライナは、西側へ接近しても決してロシアの利益を阻害しないことである。この理由から、ウクライナはEU加盟を急いではならず、NATO加盟の夢は捨てねばならない。NATO加盟は自殺行為であり、ロシアは絶対容認しない。

残念なことに、ウクライナ当局は、様々な面でこの点を真剣に認識していない。或いは認識しているかもしれないが、脆弱で幼稚な民主制度は、選挙のたびに民族主義者或いは親ロシア派選挙民の要求を満足させねばならず、したがって

ウクライナの歴代の執政者は、西側とロシアの関係を真剣に処理したことは無かった。ある時は東を向き、ある時は西を向き姿勢が定まらなかった。

次に、本誌記者は、ウクライナを訪問するたびにやっと獲得した独立を真に実感することが出来たが、ウクライナの軍事工業の指導者、政治家たちは、自己の利益を国家の利益よりも優先し、中国人に比べても利己的であった。ウクライナでは汚職、腐敗は蔓延し、その程度はロシアをはるかに超えている。ウクライナ特有の EU とロシアの間にあるという戦略的位置を有利に生かせば、政治的中立の立場を採ることによって、EU に加入しなくとも EU の投資を呼び込む機会はロシアよりも多いはずだ。しかし過去 22 年間、ウクライナ経済は破綻し 2013 年の経済成長率はわずか 0.3% である。お金は何処に行ってしまったのか。本誌記者が 1995 年からキエフでいつも聞いた話は”経済危機”であり、ウクライナの永遠の危機であると言われていた。

ここで中国に話を戻す。

ウクライナの官員と比べると、中国の官員の方がより汚職まみれ、利己主義である。しかし中国では少なくとも一部の人は自己の国家に関心を持っている。中国空母はウクライナから中国に運搬されたのであり、中国から運ばれたのではないことがその典型的な例である。中国の空母建造事業の総指揮官は空母上で死去した（殉職扱い）。汚職について述べると、中国は少なくとも表面上反腐敗運動を強化している。ウクライナの第二次亡”党”亡国の最大の原因は汚職腐敗である。これは 3 月のキエフ政変の重要な教訓である。

なぜ民主的選挙で出てきたウクライナの指導者が一人たりとも清廉潔白な人がいないのか。初期の大統領クラフチュク、クチマから今日の大統領に至るまで、汚職まみれである。ウクライナ経済は 2000 年前後にやや好転したが、現在は危機にある。この問題は文化の面から深く研究する必要があるかもしれない。

ウクライナと中国の軍事貿易を見ると、1990 年代以降は、艦載機、空母、大型エアクッション艇及び各種レーダーの輸入及び戦闘機の整備があった。毎年中国との軍事貿易はピーク時は 5 億ドルに達し、10 年間を累計すると 50 億ドルを下らない。しかしこのお金は何処に消えたのか？

この 3 月にロシアとウクライナが軍事的に対峙したとき、44 機の MIG-29 戦闘機のうち、離陸できたのはわずか 4 機だけであった。ウクライナは、旧ソ連崩壊時、40 機の SU-27SK、若干の TU-22M3 爆撃機等ソ連の膨大な武器庫を継承した。しかし 3 月危機の間、警戒に当たったのは SU-27 が 1 機のみであった。旧ソ連時代には、ウクライナは SU-27 及び MIG-29 戦闘機の修理センターであり、中国やベトナムの SU-27 を含めてウクライナの工場で修理（早期）が行われていた。それがなぜ自国の SU-27 や MIG-29 すら予算不足で修理できないの

であろうか？

旧ソ連時代、ウクライナの NIKOLAEV 造船所は全ソ連のなかで最大の造船所であった。ここで全ての旧ソ連空母が建造された。しかし独立後 22 年間、ウクライナ海軍は 1 艘の新型水上艦も受領しておらず、1 機の新型戦闘機も受領していない。全海軍で僅か 10 艘前後の水上艦が可動状況に置かれ、最大で唯一の旗艦は、旧ソ連時代の排水量 3500 トンの KRIVAK-III 型ミサイル駆逐艦である。ウクライナは、戦車の生産大国である。ハリコフ戦車工場は、タイ国に最新型の OPLOT 主力戦車を輸出した。アジア諸国だけでも、ミャンマー及びタイ国に BTR-3E 装輪装甲車及び戦車（砲射レーザー誘導砲弾付き）を、パキスタンに 300 両の T-80UD 主力戦車を輸出し、利益は少なくとも 10 億ドル得ているはずだ。

しかし独立して 22 年が経過し、ウクライナ陸軍は、わずか 10 両の新型 T-84 を受領し、76 両の T-64 主力戦車（T-64BM）を改良しただけで、全ての陸軍装備（装輪式・履带式戦闘車両、主力戦車、火砲、短距離ミサイルを含め）の数量は、22 年前に独立した時点の三分の一になっている。さらに戦備状態にある数は、この半分にも満たない可能性がある。現在ロシア軍とまともに戦えば、一回の戦闘でウクライナ軍は壊滅する。

東部のハリコフは、親ロシア地区にある。3 月の政変の際、親ロシア勢力は一部の政府建築物を占拠した。ハリコフの戦車工場は中国に 6TD2 型戦車用ディーゼルエンジンを輸出している。タイ国に対する OPLOT 主力戦車の輸出は、現在進行中であり、試験用の 5 両が輸出されたばかりである。今回の政治的動揺がどの程度この輸出に影響するのだろうか？注目すべきである。6TD2 型戦車用ディーゼルエンジンの生産工場は、長年資金不足で危機的状況にあり、破産宣告すべき状態にあった。2012 年の欧州陸軍装備展覧会において、中国の北方工業会社は、新時代の MBT3000 主力戦車に搭載する自力開発の 1300 馬力ディーゼルエンジンをすでに展示した。

ここで補足説明すると、ロシア軍が装備する全ての通常武器は、ウクライナ軍も持っている。冷戦時代、キエフ軍区は、旧ソ連軍の中で最も充実した軍区の一つであった。東欧に駐屯する集団群に次いで、全ての装備、人員が充足し、最良、最先進の兵器が集められていた。キエフ軍区の部隊はアフガン戦争に参加した際の主力であった。

上述のようにウクライナの軍事力は脆弱である。ウクライナは、如何にして EU 加盟と NATO 加盟の夢を実現するつもりなのだろうか？

台湾軍は、3 月の間のウクライナ軍隊の動きを、特にクリミア軍隊の動きを熟慮する必要がある。ロシア軍が武力を行使せずとも、6000 名のクリミア軍人（全ての S-300 地対空ミサイル部隊及び 1 個 MIG-29 戦闘機団を含む）は、クリミ

ア政府支持に転じ、キエフが任命したばかりのウクライナ海軍司令も二日目にはキエフ政権から離脱した。その理由は何か？国家に対する認識がその理由である。

ウクライナ族とロシア族は、本来血縁関係が入り混じり、二つの国家においては、多数の家庭がウクライナとロシアの混血である。ウクライナ女性の美貌は世界一（本誌の観点である）で、ロシアの男性は、ウクライナの美貌の良妻賢母を求めると言う。第二次大戦期間、ウクライナ第一、第二、第三方面軍は勇躍善戦しベルリンに到達した。キエフ及び東部ウクライナは、今までロシア語を話し、多くのウクライナ人はロシア人を外国人とは見ていない。この3月、ウクライナ臨時政府は戦争動員を宣言し、後備役を召集した。しかし報道率（注：徹底の度合いか？）は1%以下であった。

国家としての意識度、凝集力、対外防衛力に大きな問題が出現した。結論は、ウクライナは危機に備えるための国家資源を具備していなかったことになる。別の極端な例は白ロシアである。

ウクライナは極端に走り、もう一つのスラブ国家白ロシアも別の極端な路線を歩んでいる。独立後22年、ルカシェンコ政権は、欧州で最も独裁的な政権であり、モスクワからも批判されている。2011年に、EUは白ロシアへの制裁を開始した。しかし白ロシアの政治情勢は比較的安定している。ルカシェンコ大統領は、EUとロシアの対立を上手に利用し、中国カードも利用している。白ロシアは、世界で三番目の中国への軍事技術輸出国である。第二砲兵のミサイル発射車両技術はミンスクの自動車工場から来たものであり、同工場は、旧ソ連時代、戦略ロケット軍の各種運搬車両の最大の生産基地であった。次に、旧ソ連時代から、白ロシアはSU-27戦闘機のアビオニクスの整備基地であった。中国はこれらの工場との協力関係が相当密接である。

白ロシアは、工業園區の建設を通じて、ロシア、EU及び中国から同時に投資を呼び込むことに成功した。今年、白ロシアは、経済成長率の目標を3.3%に高めた。これは高度成長とは言えないが、ウクライナの経済破綻に比べればはるかに良い。白ロシアとロシアの関係が、ウクライナとロシアの関係よりも良好なので、白ロシアのロシアの軍事力に対する依存度は高い。

両国は、2015年に聯合航空基地の建設を予定しており、ロシア戦闘機部隊は白ロシアに進駐できることを期待している。2014年、ロシアはミンスクに4セットのS-300地对空ミサイルを提供した。白ロシアでさえ、軍事装備の更新速度がウクライナよりも速い。2015年には、白ロシアはロシアから最新型のYAK-130練習機を獲得する。また白ロシアは、ロシアから少なくとも18機のSU-30シリーズ多用途戦闘機の輸入を決定した。

最終結論は以下の通り。3月政変後のウクライナは、唯一の強みである若干の軍

事技術及びその輸出貿易を危うくする可能性がある。

カザフスタン（カザフ）の奇蹟

立場が定まらないウクライナに比べ、カザフは立場を明確にしている。近年来、経済は高度成長を遂げ、独立国家共同体の中ではロシアに次ぐ第二の富める国になった。カザフは、EU、ロシア、中国との経済、軍事関係を同時に発展させている。一方に偏っていない。2010年には、欧州安全保障協力機構のメンバーになった。2012年にロシア、白ロシア関税同盟に加入した。最近10年間の経済成長率は中国に次ぎ、2015年のカザフの一人当たりGDPは、1.6万ドルを超える。カザフは、EU、ロシア、中国からすでに1200万ドルの外来投資を受け入れている。私有化は、すでに国内経済の80%を占めている。カザフの2011、2012、2013年1-9月の平均経済成長率は、7.3%、7.5%、5.7%である。

巨大な経済成長は、カザフに武器更新の機会をもたらした。カザフは、ロシアの支援の下、MIG-29とSU-27の改良を開始した。SU-27は10機、多用途型のSU-27BM2/UBM2に改良する。MIG-29は30機、現在改良中である。36機のMI-24型武装ヘリは、すでにロシアの支援の下、MI-24P/V型に改良した。またカザフ空軍は、スペインからC-295型輸送機を2機輸入した。カザフは、EU及び米国との軍事関係を改善するため、米国製のUH-1Hヘリ及び少数のEC-145、EC-725輸送ヘリを輸入した。全ての旧ソ連中央アジア加盟共和国の中でカザフが先頭を行っている。ウクライナも学習すべきである。

ウクライナとカザフの歩む路線を比較した結論は何か？それは、”病める民主主義は、健康な独裁に如かず”である。ウクライナのような国家は、民主主義建設は時期尚早である。

以上